「神をほめたたえる」　　２０２５年１２月２８日　主日礼拝
ルカによる福音書　第２章２２～３８節

みなさんは、何を人生の目標としてきたでしょうか。人生の最後には、いったい何が残るのでしょうか。

年を重ねていくと、できなくなることがだんだんと増えてくる。若い頃は何の苦もなく簡単にできていたことが、年を重ねてくると次第にできなくなっていく。それでは、人生の最後にはいったい何が残るのでしょうか。私たちは何を、人生の目標として生きてきたのでしょうか。人生の晩年には、そのことが問われてくるのです。

今日の聖書の箇所にも、人生の晩年を迎えた二人の人物が登場いたします。シメオンとアンナです。この二人は、何十年間もイスラエルの希望を待ち続けました。彼らが待ち望んだのは、救い主イエス・キリストでした。彼らは救い主の到来を待ち望みました。救い主がもたらしてくれる救いを待ち望んだのです。彼らの人生の目標、彼らの人生の最後に残ったものは、救い主を待ち望む信仰と、来たるべき救い主への希望でした。

生まれたばかりの幼子イエス・キリストは、ヨセフとマリアに抱かれてエルサレムへと連れてこられました。聖書には「清めの期間が過ぎたとき」と記されています。生まれて１ヶ月あまりのイエス様は、主に献げられるために両親と共にエルサレムの神殿へとやってきたのです。主の律法に記されているとおり、山鳩一つがいか家鳩の雛２羽をいけにえとして献げるためでした。レビ記の規定によりますと、「貧しくて小羊に手が届かない場合」に「山鳩一つがいか家鳩の雛２羽」が代わりの献げ物として記されていますので、ヨセフとマリアは小羊を献げるほど裕福ではなかったことがわかります。

こうして神殿にやってきたヨセフとマリアに連れられてきたイエス様を見て、シメオンはその幼子を腕に抱き、神をたたえてこう言いました。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです」。

神様、私はようやくこの世を去ることができます。あなたの救いを見たからです。シメオンはそう言いました。シメオンが見たものとはいったい何だったでしょうか。彼は、生まれたばかりの幼子イエス・キリストを見たのです。まだ歩くこともしゃべることもできない幼子。両親に抱かれて連れてこられなければ一人で神殿に来ることさえできなかった幼子を見てそう語ったのです。シメオンとアンナは、イエス様の宣教活動を知りませんでした。イエス・キリストが語ったすばらしい教え、イエス・キリストがなされたさまざまな奇跡や癒しの業など、いっさい知らなかったのです。イエス様の宣教活動はこの時からまだ３０年も先のことでした。シメオンとアンナは、イエス様の教えも奇跡も、十字架も復活も知りませんでした。彼らは、まったく何もできない、生まれたばかりの幼子を見て、「神様の救いを見た」と言って主をほめたたえたのです。ここに彼らの信仰があります。

シメオンとアンナは、目に見えているものをほめたたえたのではありませんでした。彼らの目に見えていたのは、何もできない、守られなければならない存在、幼子イエスでした。けれどもシメオンとアンナは、神様が示してくださった啓示に従って、幼子イエスの内にある光を見極めたのです。彼らが長い間、祈りつつ、願いつつ、待ち望んできた光。だからこそ、彼らにはイエス・キリストの光が見えた。彼らにその光が示されたのです。

アンナは、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々に幼子のことを話した、と記されています。アンナはその命尽きるまで、救い主に出会った喜びを人々に告げたことでしょう。幼子イエス・キリストが世に生まれた。そのことを人々に告げ知らせたのです。その知らせを聞いた人々はどう思ったでしょうか。えー、この生まれたばかりの赤ちゃんが、なんで救い主なの。どうやって、私たちを救ってくれるの。救い主っていうから、成人した立派な大人で、すばらしい教えを説いてくれるのかと思ったのに、その救い主がただの赤ちゃんとはがっかりだ。そんなふうに思った人もいたかもしれません。そう考えた人々は、目の前にいる幼い赤ん坊の姿がじゃまをして、本当に大切なものを見ることができなかったのです。目には見えない希望の光を見させていただく。それがクリスマスの出来事です。目には見えない希望の光は、世の中が暗ければ暗いほど、見つけにくいものです。しかし、世の中が真っ暗であればあるほど、本当の光、本当の希望が必要なのです。誰も信じてくれなかったかもしれないけれども、アンナはその命が尽きるまで、救いを待ち望む人々に幼子イエスのことを、本当の希望の光のことを証しし続けたのです。

人生の晩年を迎えていたシメオンとアンナが、生まれたばかりの幼子を見て神をほめたたえた。イエス・キリストの救いは、まさに弱い者たち、力の無い者たち、世の中の役に立たないと思われている人たちのもとに来ました。そしてそのことが明らかになるために、幼子として生まれた救い主を、年老いた２人の預言者がほめたたえたのです。幼子イエスが生まれた家は、小羊を献げることもできない貧しい家でした。貧しい家に生まれた幼子をほめたたえる老人たち。私たち日本の社会は、残念ながら、この救い主をなかなか受け入れることができません。キリスト教は弱い者の宗教だからです。自分の弱さを受け入れることは、とても難しいのです。

先週、私たちはクリスマスを迎えました。イエス・キリストが降誕されたクリスマスは、解放の出来事です。私たちの社会では、弱い者たちは差別され、切り捨てられていきます。そんな世界に、救い主が来られた。ですからクリスマスは、この世で弱さを抱えている人たち、弱さを認めざるを得ない人たち、世の中から差別され、切り捨てられようとしている人たちのための救いの出来事なのです。自分の弱さを知っている者、自分の弱さを認めている者たちの救いの出来事。このような人たちは皆、目に見えるものではなく、目に見えないものに希望を置くのです。ヘブライ人への手紙１１章１節に、次のように記されている通りです。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」。イエス・キリストもまた、貧しい家に、何もできない力の無い幼子として生まれました。それればかりか、生まれてすぐ、家畜小屋の飼い葉桶に寝かされたのです。神御自身が、力の無い者、貧しい者としてこの世に来られた。それがクリスマスの出来事なのです。

人生の目標とは何か。人生の最後には何が残るのか。この問いに対して使徒パウロは、コリントの信徒への手紙一１３章１３節でこう語ります。「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る」。

ある牧師の書かれた文章をご紹介いたします。少し長い文章ですが、お聞きください。

【クリスマスになると必ず思い出す一つのことがあります。在日朝鮮人の親友の話です。彼は牧師の息子で３人の妹がいます。クリスマス礼拝を終えた日曜日の夜のこと、家族で愛餐会の残り物を囲んで食事をしていました。その食事の最中、一番下の妹がぽつりとこんな言葉を漏らしました。「なんでうちにはサンタさんが来ないの？　うちが朝鮮人だか

ら？」　お父さんとお母さんがクリスマスの礼拝や祝会の準備に大忙しで、自分の子どもたちのために特別にクリスマスのお祝いをする暇がなかったのだということを、一番下の幼い妹はまだ理解できなかったのでした。そして彼女には「うちが朝鮮人だから」ということ以外に、サンタが来てくれないことの理由が見つからなかったのでした。私はその友人の話を聞いて涙がこぼれました。もし私がその場にいたら、駆け寄ってその子を抱きしめてやりたいと思いました。そしてこう言ってやりたかったのです。「違うんだ、違うんだ、神さまもサンタさんも大忙しで、いま君のために素敵なプレゼントを用意してくれているところなんだよ。ちょっと遅れているだけなんだよ。でも君にそんな寂しい思い、悲しい思いをさせてしまって、本当にごめんなさい」。

この世の中で、差別され、仲間はずれにされ、かけがえのないその命を軽んじられている人たちがいます。もしそのような人を、神さまも一緒になって差別したり、仲間はずれにしたりするなら、そんな神さまを私は信じません。もしサンタクロースが、世の中で差別され、仲間はずれにされている子どものところに、プレゼントを運ばないとしたら、そんなサンタクロースは嫌いです。そんなサンタはいりません。

でもね、クリスマスの物語を読むと、本当のクリスマスは、この世で差別されている人、除け者にされている人、力の強い人たちから踏みつけられて、苦しんでいる人たちにとってこそ、本当に喜ばしい救いの出来事としてもたらされたんだってことがわかります。

マリアとヨセフは、悪い王様の命令で、もうすぐ生まれそうな大きなお腹を抱えてヨセフの生まれ故郷まで旅をしなければなりませんでした。ベツレヘムの町について、マリアはいまにも赤ちゃんが産まれそうなので、どこかの家に泊まらせてもらおうとしましたが、誰も泊めてくれません。仕方なく、マリアとヨセフは、家畜小屋の中で赤ちゃんを産むことにしたのです。マリアとヨセフは、この世の悪い王様のために苦しめられ、町の人たちから除け者にされる悲しみの中で、イエスさまの誕生を、クリスマスを迎えるのです。

でもその寂しいお誕生の場所に、大喜びで駆けつけた人たちがいました。羊飼いたちです。羊飼いは、町の人たちからいつも「臭い、汚い、あっち行け」と差別されていました。そんな羊飼いたちが、「家畜小屋の中であなたたちの救い主が生まれた」という知らせを聞いて、飛んできたのです。暗く寂しい家畜小屋が、じわーっと暖かい場所になったことでしょう。それが最初の、本当のクリスマスです。

ちょっと想像してみましょう。暗い夜、外の闇の中に一本の小さな蝋燭がともりました。その蝋燭は暗闇の中で寂しく心細い思いをしている人たちに、やさしくあたたかい光を投げかけ、希望や勇気を与えています。本当のクリスマスはそういうものです。私たちは、家の外にそんな一本の蝋燭がともったことなど知らずに、クリスマスのパーティーでもしているとしましょう。ふと窓の外をガラス越しに覗いても、外の様子は見えません。ガラス窓には明るい部屋と自分の姿が映るだけです。私たちは本当のクリスマスを捜し出したいと思います。暗闇の中にともったローソクを捜し出し、暗闇の中で寂しく心細い思いをしている人たちと一緒に、そのあたたかいやさしい光を分かち合いたいと思います。】

シメオンとアンナは、人生の晩年に、この世に来られたまことの光を見出し、それを人々に宣べ伝えました。彼らは、目に見えるものではなく、その先にある光、肉の目では決して見ることのできない光を見て、神をほめたたえたのです。それが、シメオンとアンナが迎えたクリスマスの出来事でした。　　お祈りしましょう。